

アリストテレス探求論の研究

—『分析論後書』における定義と論証

学位論文内容の要旨

本論文はアリストテレス『分析論後書』とりわけB巻のギリシア語テキストを丹念に読み、そこで展開される探究論について自らの解釈を提示する。日吉氏の方法の特徴はこの書において探究論は十全に展開されており、できる限り同書内の相互言及により整合的な解釈を提示するという禁欲的な姿勢にある。他方、2000年におよぶ本書の諸研究を精力的に取り入れている。とりわけこの書物ならびにこの領域の詳細な研究でありまたアリストテレスの意味論を現代分析哲学の意味論の文脈において再構成しているDavid Charles, *Aristotle on Meaning and Essence* (Oxford 2000)の綿密なサーヴェイを行い、それとの対話のなかで自説を展開している。

序章において『分析論後書』探究論における研究史を概観し、何が問題とされているかを概説する。探究論という知的活動を論証理論と定義論において位置づけるという本論文の目的を提示する。第2章で、探究論の青写真を提示する。氏はそこで「論証という方法を持つことによりはじめて探究論が可能になる」という主張を「学知条件」と呼ぶ。さらに探究の目標である「何であるか」と「何ゆえにあるか」とは同じである」という主張を「同一性テーゼ」と名づけ、これら二つをその後の考察の主導原理としている。

第3章では、探究論の基本構造は成功した探究という視点から構成されているとする。探究論の構造を検討する際の軸として探究項目、探究段階、探究方法の三つを挙げる。探究項目は「事実」「理由(何故にあるか)」「あるかどうか」「何であるか」の四つである。これらは各探究項目の区別や関連付けをめぐりB1-10の論述の基本用語である。「理由」と「何であるか」は同一性テーゼによって関連づけられる。さらに、探究の方法として論証の媒介が探究論を適切なものとするために不可欠であることを氏は確認する。

探究の過程には「存在から本質(何であるか)へ」という、テキストから一見して明らかな探究段階ばかりではなく、Charlesにより主張されている「意味の把握段階」も導入される。氏はCharlesの意味の把握、そして存在さらに本質の「科学的探究の三段階説」を紹介し、それに賛成する。

第4章では、特に探究方法に焦点を合わせて、定義と論証の関連について検討する。B3-7をテキストとし、アカデメイア的方法論の探究論への寄与を明らかにする。従来この箇所は「定義と論証は関連しない」という消極的観点からのみ捉えられてきたが、氏によればそれは十分な理解ではない。そこで氏は「定義を知るようになるための適切な方法は、この定義が正しく、かつ演繹的推論の使用を本質的に含む仕方において正しいという主張のための根拠を与えるものでなければならない」という考えをCharlesにならい「定義制約」と呼び、論証との関連を明らかにする。さらに氏は定義制約よりも基礎的な

ものとして、「定義の基底性」を主張する。これは定義に関して定義制約より「原始的な表現である」がそれは「定義は何であるかを開示する」という主張であり、これを彼の探究論的方法的基礎として提示し、各章においてアカデメイアの同僚とも最低限同意できる主張として、常にその基底性に立ち戻りながら、アリストテレスが探究論を展開していることを明らかにしている。

第5章、第6章では、探究方法の視点から論証理論を検討する。論証理論は『後書』A巻において展開され、これまで知識の形成方法と理解されている。その理解に加える仕方で、氏は探究方法としての論証理論という理解を考察する。その際、知識の形成方法や探究方法という理解と対立する見解すなわち、J. Barnes 等により主張される科学的知識の「教授の方法」としての論証理論という見解を退ける。なお、知識の原理について考察し、原理そのものは論証されず、原理の認識は論証といかなる関連においてあり、またいかに認識されるかについて論じ、帰納法の分析を通じて探究論との関連を検討する。

第7章では、探究論の基本構造を再検討し、探究項目、段階、方法のうち、今度は探究段階に焦点を合わせる。そのさい Charles の「定義実践と論証実践の相互依存性」という解釈を吟味する。定義は一般的な説明言表でなければならず、その一性を保障するものは因果的に基礎的な特徴であることから、定義は論証に依存する。他方、論証は論証不可能な第一原理に依存し、それは「何であるか」を開示する定義により与えられており、論証は出発点において定義に依存している。また、因果的な説明実践は類と種差というアカデメイアに由来する定義論の「より広い文脈」において捉えなおされる。「種差は因果上基礎的な根拠の選択にある程度寄与する」という仕方で、論証が定義に依存するとされる。この Charles の相互依存性の主張には氏によれば「圧倒的な因果性重視」があると指摘される。氏はこの因果性重視に対して「だが、「何であるか」に応答可能な説明言表、すなわち適切な定義形成を求める議論の動機付けを理解することなしに、相互依存性における定義実践への依存を十分に理解することはできない」と反論する。

第8章では、Charles の「三段階説」および「相互依存性」という解釈に動機付けられて、「何であるか」と「何故にか」との同一性について氏の見解を提示する。この同一性テーゼが主張される四箇所を取り上げ、比較する。その上で、同一性テーゼが理解される理由を、アリストテレスの議論から、とりわけアカデメイア的方法論の検討からもたらされる考え方に基づいて解釈する。定義の基底性が同一性テーゼの根底にあることを明らかにする。氏は「アリストテレスが論証理論という独自の方法をたよりに探究の構造を捉える」さいに、彼は同時代のアカデメイアの人々の関心に即して自らの議論を構成していることを明示する必要があったとする。すなわち「論証理論が何を明らかにするための方法であるのかを固定しておく必要があったのである。そのような必要性に促されて主張されたのが、同一性テーゼだったのではないかと私は考える。そして同一性テーゼの理解を支えているものは、従来の見解と共通する考え方、すなわち定義の基底性なのである」と主張する。ここで定義の基底性は「何であるか」を探究論が解明すべき「第一の目標」とすると定めていると理解される。

第9章では、分割法がどのように探究論に寄与しているかを定義の問題との関連で考察している。第10章では「定義」と通常は訳される二つの言葉「ホロス」と「ホリスモス」の語義の区別はいかになされるかを明らかにする。その上で、定義が形成されてゆくなかで、論証が有効に働いていることを確認し、探究論への寄与を考察している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 千 葉 恵

副 査 教 授 中戸川 孝 治

副 査 准教授 村 松 正 隆

学 位 論 文 題 名

アリストテレス探求論の研究 — 『分析論後書』における定義と論証

本論文は古典ギリシア語によるアリストテレスの『分析論後書』において展開される探究論の精緻な研究である。本研究の特長は第一に『分析論後書』とりわけB巻を優れた語学力を駆使して文献学的に堅固に、そして哲学的に興味深いものとして提示することに成功していることにある。第二にこの領域における優れた研究であり、最も影響力が強い David Charles の見解を丁寧に紹介し(これは邦語における最初の試みである)、Charles の研究の詳細なサーヴェイのもとにその緻密さと膨大さに飲み込まれることなしに、定義の基底性という独自の見解を提示していることに見られる。Charles においては、定義成功のための条件として挙げる一性条件と先行性条件は定義の基礎として因果論的な説明により明らかにされるものであるが、氏は「何であるか」を開示するものであるという定義の基底性こそが、「何故にか」を因果論的に明らかにする論証理論の基礎に通底していることを明らかにしている。そのことによりアリストテレスの探究論がアカデメイアにおいて説得的な地位を得るに成功していると主張している。これは Charles の見解と相補的なものであるが、なおざりにされがちな論点を明らかにした功績は確認されるべきものである。第三に、これは第二の論点と深く関わるが、「何であるか」と「何ゆえにあるか」が同じであるという「同一性テーゼ」が論じられる四箇所のそれぞれの文脈の異なり、展開を正確に捉えたことにある。

これらの特長に随伴して、「何であるか」を開示する定義の基底性に関して、今後解明すべき問いが生じる。アカデメイアに対する自説の説得という目的のために「何であるか」の理解が固定されるとするならば、ad hominem な議論にこの哲学上の重要な概念が支配されることになる。アリストテレスによる意味論および論証理論の構築に基づき、探究論の帰結として新しい定義論が構築され、「何であるか」は三種の定義により把握されるものという結論が打ち立てられ、それら三種の定義の一つとして何故にかを開示する定義が確立されている。従って、「何であるか」の概念そのものが、彼の新たな定義論を通じて豊かなものになっており、定義の基底性が通奏低音として響いていると同時にその実質において何らかの変容を受けていることも否定できず、それをいかに豊かなものとしてアリストテレスが展開していくかについて、出発点、基底としての

役割だけではなく、概念の実質的な展開をも捉える何らかの方策が必要とされていることも指摘されねばならない。これは今後の課題として残されている。

本委員会は、申請論文を慎重に審査し、口述試験を実施して十分に審議を重ね、全員一致で日吉大輔氏のこの論文に課程博士（文学）を授与することが妥当であるとの結論に達した。